

奈良大学図書館「北村信昭文庫」Ⅳ
 「新しい村」奈良支部関係資料

浅* 田 隆

はじめに

武者小路実篤は大正一四（一九二四）年暮に宮崎県日向の新しい村から奈良に来住し、翌年十二月八日和歌山に引越した。志賀直哉が奈良に住んでいたためでもあろうが、武者小路の奈良来住を期に、奈良の主として青年知識人らを中心に「新しい村奈良支部」が結成された。

ところで、奈良大学が受け入れた北村信昭文庫には「大和日報」文芸欄掲載紙や若干の「大阪朝日新聞」「大阪毎日新聞」が含まれている。北村が「大和日報」の編集部に勤務し、また北村が地方詩人でもあった関係で、文藝欄以外にも「新しい村奈良支部」の活動を伝える記事がかなり保存されており、新しい村運動を支えた支部活動の姿や雰囲気伺う事が出来る貴重な資料という事が出来る。

武者小路が奈良を去った後も支部活動は継続されており、その関連記事を「新しい村」奈良支部関係資料として紹介する。

原文は旧字・旧仮名遣いであるが新字・新仮名遣いに改めた。また句読点が欠如したケースも多いが、これは原文のままとし、総ルビに近い紙面組みではあるが、植字工が恣意的にふったと思われる不自然な個所が多く、かえって混乱を招くのでルビは適宜残す程度にした。

かつて筆者は大正中期の名古屋の思想状況を報告（『葉山嘉樹』桜楓社刊）したが、そこで、大正中期からの全国的な社会不安の中での社会改造熱の中に、社会科学的思想に根ざした社会改造運動と、精神主義的な改造運動の潮流とがあり、さらにその二つの流れは截然と区別できない渾然とした状況にあったことを述べた。奈良の青年知識人たちの「新しい村」の支部活動もまた、そのような大正期の様相の中に位置づけることができるように見受けられる。

1、盛会を極めた武者小路氏講演会

個人も生き全部も生きる

二十七日図書館開催県男子師範講堂に於て

「大和日報」大正一五年三月一日

——（北村信昭記）——

本誌既報の図書館主堀内竹蔵氏の發起にて旧熾より市内水門町に在住する文士武者小路実篤氏の講演会は二十七日午後三時より県男子師範講堂に於て開会、かかる催しにはあまり恵まれて居ない当地のこととて霏霏たるみぞれの中を定時には、さしもの講堂も空席を見ないまでに多数の聴講者がつめかけていた。主催者堀内氏の紹介で壇上に立つた氏は極めて質素な和服姿で所謂ブツた風がなく、芸術家に有勝ちなベタンチックなにおいが微塵も見えず、その謙讓な講演振はよく氏の面目を物語っているものである。武者小路と云えば氏がさきごろ發表した戯曲「愛欲」は文壇に於て近來未聞のセンセイションを捲起したものであり、宇野浩二、藤森淳三氏などは「この作家こそ天才を以て呼ぶべきであると激賞したことは既に熟知の通りである。

演題は「人生と文芸」左に概略を述べれば、氏の理想である

個人も生き全部も生きる即ち自分も生き他人も生き全部も生きる
世界、全世界の人間が天命を全うし各自の持つ自我を健全に生長せしむるを理想とする

氏の人生観から論じ

髪の毛や爪は切っても痛くないと云うことは無論神経が通つておらぬためである。がそれらを切つても痛くないと云うのは切つても別に差支えないものであるが故である。これは人間といふものをつくつたものが切つてもいいものとして（たとい我々がそれを切つても）彼はそれを黙認しているであろう。それはつまり彼の意志であるから

◇
と同じように、我々がこゝ肉体を切れば痛みを感じる。この痛み即ち苦痛をすると云うことは人間を作つたものの意志に反するものではなからうか
毛や爪を切つて痛くないのは切つても差し支えないと云う人間造主の意志を信じ得るように肉体を切つて痛いののはさるべきものでなく、それを健全に保たしめることが同じ造主の意志であることを信じ得るものである

◇
さすれば我々は大きく健全に（靈肉とも）生くるを以て正しき生き方であろうと思う。自分も生き他人も生き全部も生きる世界を自分は望んでいるものである。自我をすこやかに成長させることに努むべきであろう

しかしその為には即ち自己を生かす為には他人の自我を他人の自由や幸福を害してはいけない。即ち個人も生き全部も生きる世界こそ

正しいものであらねばならない……そこには国と国との争いや、階級と階級の争闘もないであろう。我々はその正しい生き方に向って突進すべきである前言のとおり人間が健全に生きることが人間造主の意志である親が子に望むと同じように……

もし我々がお互に健全に生きられたいとするならば、それは人間の罪であらねばならない。即ち人間がやったことである。が故にその不健全な人間によって健全ならしむることが出来ると信じている。そうするために進んで行きたい

文芸は我々相互の真情を交換するものである。立派な精神作家によってかかれたものは、人生に於ける我々のよき指針であり我々の生活の意義を固くし、求むるものには与えられ希望なきものも希望を見出すにいたるものであらねばならない

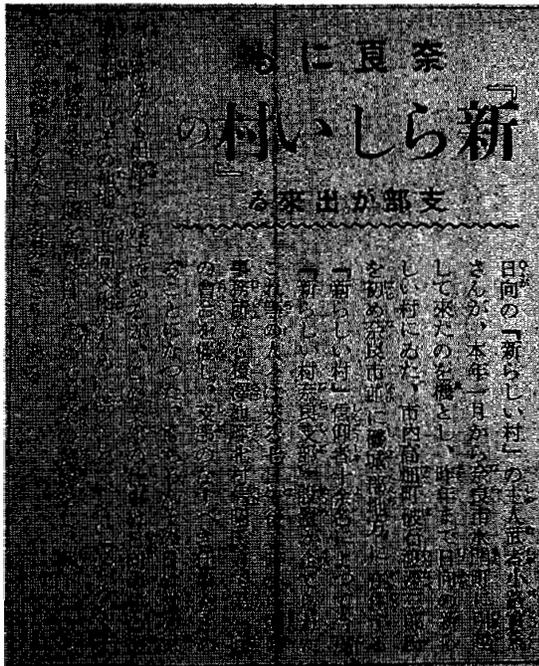
と云う意味のこと極めて謙讓な口調にて一時間にわたり口述、午後二時拍手裡に閉会した。蓋し文壇的にイビ振らない当地に一つの確かなシヨックを与えたものであろう

2、奈良にも『新しい村』の支部が出来る

「大阪毎日」新聞「奈良版」大正一五年三月二日

日向の「新しい村」の主人武者小路実篤さんが、本年一月から奈良市

水門町に引越して来たのを機とし、昨年まで日向の新らしい村にいた、市内高畑町破石渡辺三郎氏を初め奈良市並に磯城郡地方に在住する「新らしい村」信仰者十余名によって今度「新らしい村奈良支部」設置が企てられたこれ等の人々は来る七日午後二時から臨時事務所なる猿沢池畔北村信昭氏方で第一回の会合を催し、支部のなすべき仕事をきめることになった、もちろんその日は当の武者小路さんも出席するはずであるが、この支部の仕事は日向の村の援助を主とし、その他地方共同文化のために尽くしたいといっている、そして今後毎月第一日曜を会合日と定めて事業の協議をし、県下にこの方面の理解ある人達を募るそうである



3、武者小路実篤氏の「新しき村」の支部が奈良へ設けられる

平等なる自由と同一なる生活そして郷土の文化を
生命とする支部の精神

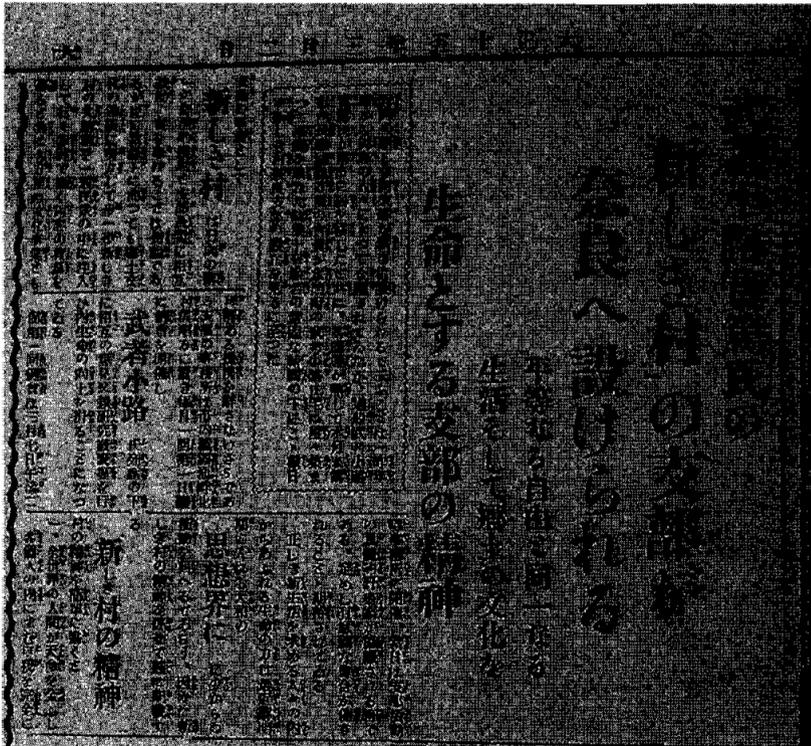
【大和日報】大正一五年三月二日

日向の新しき村支部が当市に設けられると云うことは一昨年頃から同志の人々によって企図されていたが、過般武者小路実篤氏が当市に居を移したと共に、其機運が熟して本月初来当市内及磯城郡方面の会員が水門町の武者小路氏宅に度々集まって協議を重ねた結果十有余名の鞏固な結団の下にここ数日前新しき村奈良支部の設立を見るに至った

支部の事業として新しき村は日向の第一の経済的援助と支部員間に相互扶助の実を挙げることは勿論であるが更に当県下に向つても郷土文化の進展に努力して歩一歩新しき村の大精神を一般民衆の中に注入していく方針で広く同志の会員を募ると共に各方面の文化事業とも理解ある提携を辞さないそうである支部の事務所は市内猿沢池畔北村信昭方に置き毎月一回第一日曜に例会を開催し、武者小路氏列席の下に相互の意見交換研究発表等を行い内生命の向上を計ることになつてい

尚第一回例会は三月七日午後二時事務所で開催、当日は支部活動の具体的計画案が協議される筈である、定めし有意義な会合が催されることと期待されている

正しき新生活を求める人々の内からあふれる生命の力は最近黎明期



に入れる大和の思想界に少なからぬ衝動を与えるであろう、因みに新しき村の精神を併せて茲に記載する

新しき村の精神

村の精神を簡単に書くと

- 一、全世界の人間が天命を全うし各個人の内にすむ自我を完全に生長させることを理想とする
- 一、その為に自己を生かす為に他人の自我 害してはいけない
- 一、その為に自己を正しく生かすようにする、自分の快樂、幸福自由の為に他人の天命と正しき要求を書してはいけない
- 一、全世界の人間が我らと同一の精神をもち、同一の生活方法をとることで、全世界の人が同じく義務を果し自由を樂み、正しく生きられ天命（個性をふくむ）を全うすることが出来る道を歩くように心がける
- 一、かくの如き生活をしようとするもの、かくの如き生活の可能性を信じ、それを全世界の人が実行することを祈るもの、又は切に望むもの、それは新しき村の会員である、我等の兄弟姉妹である
- 一、されば我等は国と国との争い階級と階級との争いをせず、正しき生活にすべての人が入ることによって、入ろうとすることによって、それ等の人が本当に協力することによって、我等の欲する世界が来ることを信じ、又其為に骨折るものである

4、古都に芽生える「新しい村」の運動

「大阪朝日新聞」大正一五年三月二日

「新らしい村」の創設者武者小路実篤氏が奈良へ移住してから「新らしい村」の支部が出来るとのことびあったが、昨年来「村」を出て奈良に來ている渡辺三郎氏幹旋のもとにいよいよ成立し事務所を猿沢池畔北村信昭方に置き来る七日第一回例会を開き支部としてなすべき事業の相談をするそうである、武者小路氏の



理想は

自分も生き他人も生き全部も生きておたがいには犠牲にならず、また犠牲にせずには自由独立人ばかりの立派な世界を建設するにあつて、支部員の協力でいろいろの文化事業を営みたいというにある、参加した人々は各階級に互つて目覚めた若い人達で、加うるに奈良在住の洋画大家中や作家志賀直哉氏らが後援するというのであるから、古い因習と煮え切らない姑息とで固まっている奈良もその衝動で目覚めつつ彼の人々が希望する芸術の都となり得るであろう、ともかく物心両界にわたる新運動で当面の現実問題にのみとらわれて利害關係にのみあくせくしている人達の知らぬまにある一つの尊ぶべき仕事となされ行くを期待し得るといわれている——写真は武者小路氏

5、武者小路氏も舞台に立つ

新しい村奈良支部の決議

「大阪朝日新聞」大和版「大正一五年三月九日

いよいよ出来上つた『新しい村』奈良支部の第一回総会は七日午後二時から猿沢池畔北村方で開かれた来会者二十四、五名まづ武者小路実篤氏から新しい村の生活や奈良支部に対する希望を詳細に述べた後、支部の事業を決議した

(一) 毎月第一日曜の例会以外に日向の村の生活同様釈迦降誕祭(四月八日) トルストイとゲーテの誕生日(八月二十八日) 新ら

しき村創設記念日(十一月十四日) 耶穌降誕祭(十二月二十五日)

には何等かの意義ある会合をすること(二) 毎週木曜日の夜は各自が村の発展について考え折り得るものは折ることまた余暇あるものは支部事務所懇談的に集まること(三) 毎月一回第三日曜日の夜演説会を開催すること(四) その他会員相互の内生命向上と地方文化進展のために努力する第一歩として左記の催しを随時行うこと

イ、講談会口、美術展覽会ハ、戯曲と詩の朗読会ニ、音楽会ホ、研究会(思想、芸術、教育、社会、経済各方面にわたる)ヘ、旅行(劇及び映画、古代芸術の鑑賞、生産工業及各文化事業視察)

(五) 日向の題一の村出版の文芸書類及雑誌の代理販売をなすこと

右をわつて各談笑をまじえ午後六時閉会したがこれら支部事業には武者小路氏も絶えず顔を出し劇などには自ら舞台に立つそうである

6、新しき村奈良支部 第一回例会

「大和日報」大正一五年三月九日

既報新しき村奈良支部第一回例会は七日午後二時から市内猿沢池畔北村信昭方支部事務所で開催、二階八畳の春日山を望む明るい座敷に集まつ武者小路実篤氏を始め会員十九名の顔には「此人を見よ」の強い決意と宗教的の敬虔と人類愛の純情とが満ち溢れていた。定刻先ず

武者小路氏から、奈良支部設立の喜びと感謝の言葉に始まって日向の第一新しき村の現状を精神及経済生活両面に涉って詳細に説かれ更に奈良支部に対する希望等を持前の謙讓な態度で約一時間半述べられた後、支部今後の方針に就て会員間に熱心な協議が開かれ、其結果左記事項を可決し終つて美しい友情と心地好い談笑の裡に午後六時會を開じた

決議事項

- 一、毎月の例会（第一日曜以外日向の村の生活同様、釈迦降誕祭（四月八日）トルストイとゲーテの誕生日（八月二十八日）新しき村創設記念日（十一月十四日）耶蘇降誕祭（十二月二十五日）には何等かの意義ある會合をすること
- 二、毎週木曜日の夜は各自が村の發展に就て考え折り得るものは折ること又余暇あるものは支部事務所にて懇談的に集ること
- 三、毎月一回第三土曜日に演説會を開催すること
- 四、其他会員相互の内生命向上と地方文化進展の為に努力する第一歩として左記の催を随時行ふこと
 - イ、講演會　ロ、美術展覽會　ハ、戯曲と詩の朗誦會　ニ、音樂會
 - ホ、研究会（思想、芸術、教育、社会、経済の各方面に涉る）　ヘ、旅行（劇及映画の鑑賞、古代芸術の鑑賞、生産工業及各文化事業視察）
- 五、日向の村出版の文芸書類及雑誌の代理販売をなすこと

以上

7、「新しい村」支部の盛沢山の仕事

- ◇……ゲーテ祭にクリスマス
 - ◇……トルストイ祭に村祭り
- 会員の募集は慎む

「大阪毎日」新聞「奈良版」大正一五年三月九日

武者小路実篤さんが日向の「新しい村」から奈良に引越して来たので、これまで武者さんの芸術を慕っていた人達や、新しい村の村外会員として村の事業を援けていた人達が相よつて生れた「新しい村」奈良支部では会員の初顔合せを七日午後三時から奈良市猿沢池畔北村信照方（現）で開いた、出席者は主人公武者さんをはじめ市内



高畑町の洋画家浜田保光氏高市郡岡の田園詩人松村又一氏など合せて二十五名、定刻御大は「新らしい村」の精神および真の使命などを物語り、それから奈良支部の今後なすべき仕事についての相談に移り出席会員一同が隔意のない意見を交換した結果

毎月第一日曜日を例会日と定めてできるだけ出席してお互いを知るように努めよう、例会以外にゲーテ祭、クリスマスストロイ祭、村の祭などは特に盛大に行おう、会費は一人一ヶ月五十銭と定め三十銭を村に送り二十銭を奈良支部の費用に積み立てようとして村の事業としてはさしあたり講演会、旅行朗読会、展覧会などを開きなるべく村を一般に理會して貰うように努め、積極的に宣伝ピラなどを配布して会員の募集をやることは慎もう

との申合せができあがつたそれから出席者一同は武者さんを中心に芸術談に花を咲かせ午後七時頃散會した

8、新らしい村 武者サンの希望を述べ

奈良支部の会員に対して

【奈良新聞】大正一五年三月九日

七日午後二時から武者小路実篤を中心とする「新しき村」奈良支部会の発会についての懇談を開催したが其際武者小路さんは会員に対する希望として左の如く語った

奈良の会員は村の精神の下に各自がやっつてゆきたい事をやり自分の意

見に賛成した人と共にやっつてゆく事にして多数決ですべてを極める事は面白くないと思う、それから支部の仕事について意見を出す場合は自分でやれることは主張するようにし反対者があつても其の意見が村の精神に合致していればそれが自分一個でやれる仕事である時は自分が責任を持つてやっつてゆくことは差つかえないが其人の意見のために他を束縛する様なことはしたくない、一方反対者も其の意見が支部全体でない以上は好意を以て見て行くことは必要だと思ふ斯ういうやり方で行くと会員がふえて何千何万となつた場合意見が区々で纏りがつかないように考える人もあるが知れないが各自が人間の生命に重きを置いて仕事をするのだから意見は其んなに相違はあるまいと思ふ、皆が此気持で進んで行けばよし献身的心なくとも各自の余力を集めて大きな仕事が出来らうと思ふ、おたがいが社会改善を心掛けるにも闘争とか破壊を主に置いては駄目であつて全部が生きる為の運動が今の日本に必要なと思ふ 勿論此の仕事が完成して自分達の考へて居る様な世界が来ると云うことは容易なことではないかも知れない 然し各自が正しい世界の出現に対して希望に満たされた一つの信仰をもつこと想像の世界をもつことは其人の心を愉快にし前途に光あらしめ生活を美しく力あるものにする事が出来ると思ふ、現に東京支部の人達の中でも物質生活には随分こまつて居る者もあるが元気で希望のある生活を送つて居る実例がある其処から何物かの力が生まれなければならぬ、其力がやがて日本全体をよくしようとする運動 世界平和の為の運動となるのだと思ふ、働く上に於ても精神と物質とをよく調

和して若し両方伴って行くことの出来ない人は何れか一方を生かすようにして一年一年底力ある生命を鍛え上げて行くのが必要だと思ふ日本の多くの思想は一時的には非常に元氣であるものの、華やかなもの、乱暴なものがあるが其考えが重なる時は全部生命をなしくずしに幻滅さしてしまふようなものが多い、それでは何にもならないと思ふ、生命の火と云うものは蠟燭の火のようなものであるから始めは小さくともそれがだんだん集まれば大した光になるものである支部として日向の村を経済的に援助する事も勿論必要だがそれもやがては必要がなくなる時期が来るしさもなくとも奈良の支部は奈良支部で立派に意義ある仕事を今からやって行く必要でそうすれば他府県の支部も之れを真似る、それが蠟燭の火がだんだんに点されて行くように日本全国更に世界の隅々まで拡がって行くようになる自分は今後も此の考えをもつて奈良や大和全体の人々に何処迄も失望する事なく何か此の土地から生みだしたいと思ふ自分が七八年来宮崎にいた当時は思想的にいい影響も大して現実に見えなかつたが自分が蒔いた種は必ずやいい芽をだす時期が来ると思ふそれは去年の村の記念日のお祭りに幾分見えて来た……今迄付近 町村の人達には余り村へ好意を持たない人も随分あつたが其祭の夜他所から来た町村の沢山な人達が帰りに村の向う河岸の山の上から村に向つて万歳を幾度も叫んだそんな純真な心から村の成長を祈ってくれる声であつたそれから今一つ付近の町村にも最近会員になる人などが出来て其人達を通じて一般の人が村は今に自分達を精神的にも物質的にも悦びあるものにしてくれるのだと云う事が判

つて来たと云うような声を聞いたのは悦びである奈良の支部もそんな工合にしたいものである「新しき村」の奈良支部の仕事と云えば奈良県の人達が悦んで迎えてくれるような存在でありたい、皆が助け合つて不幸な人には不幸の中に力をもたせるようにして希望は皆の悦びとなり幸福となり同時に生々した生命に燃ると云う事が必要である大和は歴史的にも随分意義ある土地なのだから此点から云つても皆の力で一つの新文明を生み出したものである(文責記者)

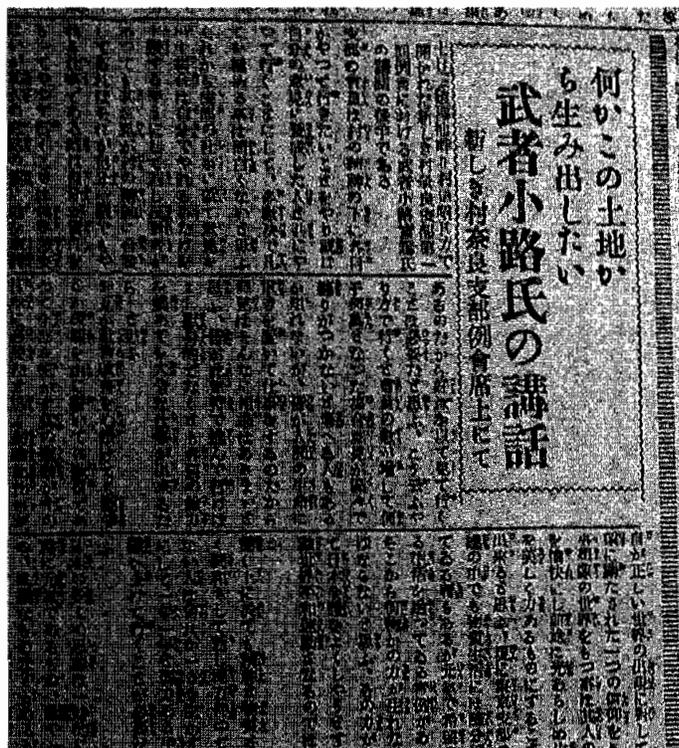
9、何かこの土地から生み出したい 武者小路氏の講話

新しき村奈良支部例会席上にて

「大和日報」大正一五年三月九日

七日 猿沢池畔北村信昭氏方で開かれた新しき村奈良支部第一回例会における武者小路実篤氏の講話の後半である

支部の会員は村の精神の下に各自がやって行きたいことをやり或は自分の意見に賛成した人と共にやって行くことにして、多数決で凡てを極める事は面白くないと思ふそれから支部の仕事に就いて意見を出す場合は自分でやれる事だけを主張するようにして若し反対者があつても其意見が村の精神に合致していればそれが自分一個でもやれる仕事である時は自分が責任をもつてやって行くことは何等差支ないが其人



の意見の為に他を束縛するようなことはしたくない、一方反対者もその意見が支部全体に害がない以上は凡てが人類の為であるのだから好意を以て見て行くことは必要だと思ふ、こう云うやり方で行くとなると考の数が増して何千何万となった場合意見が区々で續りがつかないと考える人もあるかも知れないが、皆が人間の生命に重きを置いて仕事をすのだから意見はそんなに相違はあるまいと思ふ、皆が此気持で進んで行けばよし献身的でなくとも各自の余力を集めても大きな仕事が出

来るだろうと思ふ

お互が社会改善を心掛けても闘争とか破壊を主に置いては駄目であつて全部を生かす為の運動が今の日本に必要なだと思ふ勿論此仕事は完成して自分達の考えているような世界が来ると云うことは容易な事ではないかも知れない、然し各自が正しい世界の出現に対して希望に満たされた一つの信仰をもつ想像の世界をもつ事は其人の心を愉快にし前途に光あらしめ生活を美しく力あるものにする事が出来ると思ふ、現に東京支部の人達の中でも物質生活には随分困っている者もあるが元気で希望のある生活を送っている実例がある、そこから何物かの力が生れなければならないと思ふ、その力がやがて日本全体をよくしようとする運動世界平和運動となるのではないか

働く上に於ても精神と物質とをよく調和さして若し両方伴つて出来ない人は何れか一方を生かすようにして一年一年と底力ある生命を鍛え上げて行くことが必要だと思ふ

日本の多くの思想は一時的には非常に元気であるもの、華やかなもの、乱暴なものなどがあるが其考えが重なる時は全部の生命をなしくずしに幻滅さしてしまふようなものが多い、それではなんにもならないと思ふ、

生命の火と云うものは蠟燭の火のようなものであるから始めは小さくともそれが段々集れば大した光になるものである、支部として日向の村の経済的に援助する事も無論必要だが、それもやがては必要でなくなる時期が来るし、さもなくとも奈良の支部は奈良支部で立派に意義

ある仕事を今からやってみようとする必要で、そうすれば他府県の支部も又之を真似る、それが蠟燭の火が段々に点されて行くように日本全体、更に世界の隅々まで拡がって行くようになる。自分は今後も此考えをもつて奈良を始め大和の全体の人々に何処迄も失望することなく何か此土地が生み出したいと思つてゐる

自分は七八年来宮崎にいたが未だ思想的に好い影響も大して現実には見えなかつたが自分が蒔いた種は必ずやいい芽を出す時が来ると思ふ、しかもそれは去年の村の記念日に幾分見えて来た……今迄付近の町や村の人達には新しき村に余い好意を持たぬ人も随分あつたが去年の記念祭の夜他の町や村の人達が帰りに向う河岸の山の上から村に向つて万歳を幾度も叫んだ、それは純真な心から村の成長を祈つてくれる声であつた、今一つは最近付近の町村にも会員になる人が大分出来て其人達を通じて一般の人が「村は今に俺達を精神的にも物質的にも悦びあるものにしてくれるのだと云う事が判つて来た」と云うまうな事を聞いたのは悦びである

奈良の支部もそんな具合にしたいものである、新しき村の奈良支部の仕事と云えば奈良駅の人達が悦んで迎えてくれるような存在でありたい、皆が助け合つて不幸な人には不幸の中に力をもたせるようにして希望は皆の悦びとなる幸福となると同時に生々した生命に燃えたと云うことが必要である

大和は歴史的にも随分意義ある土地なのだから此点から云つても皆の力で一つの新文明を生み出して行度いものである（文責記者）

10、新しき村より 定例の演説会

戯曲「愛欲」の朗読もある

七月四日午後二時から 市内満月会の事務所で

「大和日報」大正一五年七月一日

新しき村奈良支部の定例演説会は来る四日午後二時から市内大豆町満月会事務所にて開会、入場無料、当日の演題演説者を挙ぐれば左の如し

題未定

武者小路実篤氏

夢想の世界

中川 明氏

希臘への憧れ

谷山 藤四郎氏

経済上より見たる我国現在

下野 宗逸氏

の道德

演説後、左の両氏によってドラマの朗読をなすと

◆戯曲朗読◆

武者小路氏作

「愛 欲」

渡辺 三郎氏

宮尾賢次郎氏

「愛欲」は世界的の文学として各方面の賛辞を受け、当時我文壇に於て一大センセーションを巻き起せしめたもので七月一日から万都の期

待を以て築地小劇場に演出されているものである。尚近く英訳の出版を見る程の雄篇で、四日の朗読は人員の都合上第四幕一場のみであるが、朗読者は研究的態度を以て、戯曲朗読に新生命を拓くべく意気込んでゐる。演説会後七月例会にうつり会員相互扶助の具体化村外会員が社会経済上に働きかける第一歩として、都会と農村の会員の協力によって左の事項の協議をなすと

一、農産物販売店設置の件

一、園芸□設置の件

一、絵画研究部設置の件

因に定例演説会は今後毎月第一日曜に満月会事務所にて開催する筈なるも八月は休会するやも知れずと

11、新しき村創設 八周年紀念演説会

七日満月会事務所にて

「大和日報」大正一五年一月一日

この十一月は武者小路実篤氏が日向に新しき村を建設してから丁度八周年に該当するので奈良支部に於ては七日正午までに会員一同集合の上紀念撮影をなし引続いて演説会を催し終了後支部十一月例会に移り特に当日の来会者には会員手製のおしるをご馳走すると当日の演題左の如し

順序

創設八周年に際して

終始を統ぶるもの

宗教と科学

題未定

脚本朗読

イブセン作島村民蔵訳

「皇帝とガリラヤ人」

第二部三幕の四

ジュリアン（北川）

マキシマス（渡辺）

因に十四日は創設紀念日にあたり丁度ロダン誕生日にも該当することとて支部にては意義ある催しをなすべく目下計画中であると

12、日向新しき村号

注 紙面六段、広告以外の全面をさいた企画で以下のA-Iの

記事が並ぶ。紙面の性格理解の便として、紙面の最後に置かれてゐる「編輯雜記」を最初に紹介しておく。

「大和日報」大正一五年一月二九日

A 編輯雜記 北村 信昭

新しき村号とまではいかずとも村の人達の作品を本欄で紹介した

いと可也り以前から思いもし渡辺氏からもその様な話もあつた
 ◇たまたまこの十一月が新しき村創設八周年に該当するといふの
 で十四日夕刊の本欄を新しき村号として祝祭にかえようといふこ
 とになり原稿の依頼は全部渡辺氏に一任することにした◇折悪く
 先月の二十二日本社印刷工場が災厄にあつてその復旧に多忙をき
 わめ予定の十四日が今日まで延引したわけである◇ところが集ま
 った原稿が予定枚数の三倍という素晴らしさ……執筆者諸兄姉に
 満腔の謝意を表するものであります◇とりあえず本号は日向の人
 達のをまとめ日向新しき村号といたしました

B 村の現状 古川記

日向灘の波浪は殆ど一直線の白線を南北に延々と描いて日向の
 岸を洗う、そしてこの岸に立つて西を望むと、地は草原と森林と
 点々たる部落とより成る茫漠たる、傾斜地となつて、だんだん高
 まつて行くが、遂にそれは天際に尽きて尾鈴の連山を形づくる。
 そこで若しこの山脈の背に立つて海を後にすれば、山は海側と反
 対に急勾配となつて眼下の盆地に落ち、そして之を一つの急流が
 あちこちに姿を見せ乍ら溪谷を刻むのが見えるだろう。そして若
 し更に瞳を凝せば、この盆地の底にひとところ白壁の家々が星のよ
 うに輝くのが見えるだろう。この盆地が石河内、この急流が小丸
 川、そして白壁の輝く一角が新しき村だ

自分たちはここで山を下り、小丸川を渡つて村の土地に立たね

ばならない。朝霧の立籠めている中は、自分たちは□^{びょう}茫たる高
 原にいる思いがする。だがやがて霧がはれると、盆地を廻る山々
 は姿を顕し、村は三方を川に囲まれた、面積五町歩余りの半島状
 の台地であることが判る。そしてそここの林の蔭に二十余りの
 家があるのが見え、やがて労働の鐘が鳴るとそこから兄弟姉妹が
 仕事に出て来る

凡そ十人の兄弟は馬を追い、稲を刈り、果樹園の草を取りして、
 畑にかかり、五人の兄弟は印刷場に行つて機械の音を響かし、あ
 る兄弟は鉈を腰にして薪山に行き、ある兄弟は鶏舎で五六十羽の
 鶏に餌をやる。そして朝の炊事を終つた姉妹たちは洗濯を始める
 こうやつて昼迄三時間働き、午後又三時間働く。夕方になると
 トロで荷を運んで来た兄弟の声が川向うより呼び、やがて荷は索
 道で村に渡される。昼休みにテニスをした兄弟たちは夕方も又出
 て来て懸命に遊ぶ

かくて日が暮ると、星の美しい山間の夜が来て、窓々には慎ま
 しい灯がともる、そしてその下に兄弟姉妹は或は集まつて談笑し
 或は孤り机に向う夜半に近づいて灯は漸く消されて行くが、最後
 の灯は中々消えない。暁近くになって漸くそれも消され、新しい
 一日の始まる頃になつて、村の一日は漸く終る

C 小 感 川島 伝吉

新しき村も今年で満八周年になりました。一里五丁の水路が十

年までに完成して、小さくても電気でもおこせたらどんなにうれしいかと思えます。水路が出来ればまた田地も三町歩ぐらいはでき、三十人の食べる米はとれることになると思えます、出版の方の仕事も発展してくれることと思えますし、自分は画家であるので、十年迄にもし村の美術館とでもいうようなものでも出来たらどんなに喜ばしいことかと思ったりします。今村にあるレンブラントやロダンやその他いくつかのオリヂナルなど、当を得たところにおかれたらどんなにかいいだろうと思えます、しかしその前に病気の人の療養所は是非ほしいとも思えます。現在自分達はいろいろ楽しみもち瞬間々々には大いに満足も感じて生きてはいませんが、ふと来た見物の人達にも新しき村らしい感じがすぐに感じられる村にしたいとは何かにつけて思うことであつたり、その外先のことを思うのは面白かつたりでさまざま希^つしたいことも従つて湧いてくるのを感じそれを実現してゆきたいものに思えます。

村には大分いろいろなよい人が集まりましたがこの先ますます集まりまた今いる人達が大人になつたりもつと成長したりしてこれからこそだんだん村は本当に面白くなれると思ひ、たのしみます。しかしいろいろ決心や努力や更に賢くなることやの、ますます必要を感じて来るのもこれからのことと思ひます

D 新しき村より

加藤 勘助

人間は一人前、どれだけの土地が必要であり、又どれだけの勞

働をすれば生活出来るのか、こうした根本的な問題について、新しき村では事実でそれを知る事が今に出来ると思は思っている、二三日前ある兄弟から、米を作る本を読んだ話をきき僕はうれしく思つたつまり定つた段別から増収する作り方で、それによると普通一段から初二十俵取れるという。土地の広くない今の村では、殊に経済的に土地を生かす事は非常に大切である。麦も他の兄弟が本で教わつた新しい研究的な作り方で、今年は蒔いて見る積りだという。村の水路も最も難工事とされていた岩石のトンネル二十間が開通し、それから他の方の工事を進める筈。水路は後五千円を必要とし五千円あればあと十ヶ月で完成するのだと水路係の兄弟の話。金のことは僕には分らないが水路が完成し皆の食べる米が取れば村は色々な意味で一先づものになつたという感じがすると思ふ。印刷の方も漸次本が売れているが、それまでには更により成績を挙げるだろうし、そうなれば生活費は只に近いものとなり、印刷の方の利益で他に又新しい仕事が出来て来よう。勿論予算通りには行くまいが、而し水路が出来れば電気も起せる。電気を利用した小さい工場も出来るだろう。色々面白い事や、人間の為めになる仕事や研究も考え出される。我等は益々希望と信仰を村に対してもたないわけには行かない。 十月二十七日

E 感想

松本 廣吉

自分たちは愛されて居る者等である、それを感じる者にとつて、

新しき村は真の故郷である

自分は思わず目がしらの熱くなるのを感じる、決心を生かそう
と思う

村外会員の愛、そのみではない

それは希望の愛とも云うべき愛だ、名づけ難い大いなるもの、
見、信じ待っている世界

その世界のいぶきから来るのがこの（本能的に我々の内に入り
こんでいる）動かせない大きい愛

この愛を感じればこそ自分は必ず必ずと思う、決心し起つ事の
出来る底力の成長するのを感じる事が出来る

自分の生涯と此の愛、それは光りに添う影の様なものである
この愛を感じる時自分の生涯の□かなるものであるのと思う

幸福なるかな！としみじみ思う

目立たぬが如き村の生長

その中には生きる事に苦しみ、愛している精神が育っているの
だ自分達はそれを信じている

自分は謝し続けている毎日毎日
村を愛している兄弟達に

（十一月一日）

F 吾等の郷土

杉山 正雄

二三年前のことだが、村の悪口を云い、村をつぶすために色々
のことした人があったが、彼は村を出る時には私にこう云うたも

のだ。一寸した用事で旅行するが二週間もしたら帰って来る。ど
うしてそんなことを云ったのか訳が解らなかつたが、考えて見る
と、そうとでも云うより外には村を出る口実はなかつたのだ。そ
う云う種類の人達で公明な理由で村を出た人は一人もない。併し
彼等も村で生活すればその生活に何か彼らを離れ難く思わせるも
の、村を出る彼等の考えの中に何か公言をはばかるものがあるこ
とは感じているのだ。ただそれが何か知ろうとしないだけだ。知
ると都合が悪いのだ。併し何時か知らなければならぬ時が必ず
来る。彼らに問うて見るがいい。君達の内に一人でも村を忘れて
了った人があるか、何かの時に村を思い出さなかつた人があるか、
と。

私は以前に彼等の一人から手紙をもらって、彼が村の単純な生
活や簡単な事物の上に恰も故郷を思うが如き満ち溢れる感情を持
って居る事を知つたが、それが彼等の偽ることの出来ない真情な
のだ。

新しき村の無い生活はどんな生活だろう。よし私達の生活が新
しき村に働かない生活であつても新しき村を私達の村と思う事に
何のさまたげもない。どんな場合にも私たちは新しき村を失つて
は生活することが出来ないからだ。新しき村は私達の生活に何う
しても必要な地盤である。

（十月三十日）

G 入村希望者に

福永 友治

村もこの十一月十四日で八周年を迎えます、創立当時の事を思うとまるで夢のような気がします、然しそれは真剣な魂に湧って築き上げられた八年間でありませう

昔の村きり知らない人は現在の村を見たら驚くでしょう、そしてその進歩の早さを心強く思つて貰えるでしょう、村の仕事は常に堅実に進んでいます、そしてだんだん村らしくなっています、これを喜んで貰いたく思います、今に多勢の人が住む事が出来るようになると思つています

今の処余裕がないため多くの、よき入村希望者に来て戴く事が出来なつのを残念に思い、又大変すまなく思つています、然し今村に入れないからと云つて、失望して貰いたくありません村はぐんぐん進んでいるし、今にどんだん来て戴く時の来る事を信じていますしそのために全力をつくしています

然し村では無理出来るだけは無理してもよき人は来て戴きたく思いますから、入村希望者は断られるのを予め覚悟の上で手紙を下さればうれしく思います、もし少しでも余裕があれば来て戴くし、余裕がなければ当分第二種会員として働いて戴きたく思います、兎に角手紙は戴きたく思います、そして手紙と共に写真を是非送つて戴きたく思います、これは一寸変なようですけれども、写真を見ればその人の感じが凡そ解るし、それに手紙の感じとは又特別な親みも感じてお互にとつていいと思つたのです

H 百姓

悦田 喜和雄

我々は日に新しい決心を深めて村を新らしくする事に努めていますが、そして諸君を迎える日を待っています
今に村の存在は日本の誇りとなり、又人類の喜びとなり、平和となるでしょう
二六、一〇、三二夜

此頃の自分は百姓の方が忙しくて困っている、自分は百姓は好きである、人間が人間らしい仕事の出来るのは百姓だと信じもし、そう感じてもある、しかしこう忙しくてはやりきれない、昨夜も米の選別が済んだ頃時計がコンと一時を打った、ストリンドベリーの死の舞踏が又見たくなくて古い本の中からぬき出して来ていたが駄目だった

湯も使わないで寝床に入ったら気がついた頃は早明るくなっていた、いくら何でも一日二時間位の本を読む時間と夜を全部自分の物にしないとやりきれない、いやになって了う

先覚者達が、今日の百姓は土から離れているとか、土を農民に返せとかよく云っているが、自分は百姓が土から離れていると云う事はかなり前から感じていた。しかし土を農民に返せ、なんて違つていると思う。百姓は土と共に生きていた。土には百姓がつき物であり百姓には土がつき物である、いくら持つて行つたつて都会人が土をどうする。地主は多く都会人だから土を都会人がとつていふと云うならそれも云えようがそれは話が違つたと思う

百姓もどうかして本を讀む時間を作りたものだと思ふ。百姓が今の百姓のような商売氣をすてて土にくつついてしまつたら本當の百姓になりきつたら本を讀む時間も十分出来ると思ふ。

今の百姓は資本主義文明に酔つぱらつて足がタジタジしている。余り算盤玉をハジキ過ぎる。お金儲け許り考え過ぎる。都会人の食い疲れた口をたぶらかし見疲れた眼をくらまして金を取る事を考えている。冬に夏の物を作り冬に夏の物を作る為にあせつてゐる

自分は今の百姓は嫌いだ。昔の行灯の灯で糸を取る。あの紡車の音が聞きたい。馬鹿だ野蛮だ、迷信だと捨て去つてしまつた古い様々の事がこいしい。自分はこれから本當の百姓になりきつた人々のやつていた色々の事をまじめに考えて見たい。小作争議だつてあれは今始まつたものではないと昔から百姓が一つの職業として独立した時からもう既にあつた事と思ふ、ただ今日の小作争議はただその争議に百姓らしさが無くなつてだんだん三百に似て来たと思ふだけだと思ふ。それと近頃の小作人が小作人を鼻にかけて同情を買ふと思ふ。それは非常に見苦しい事である。丁度貧乏人が貧乏を売つて同情を買わんが為めに貧乏貧乏と云う様にそれは金持ちが金のある事を自慢に金々と云つてゐるより見苦しい位だ

よなべ（夜業）を済ませて寢床に這入つてお龜のような形でこれを書き出した時十一時が鳴つていたもうおつつけ十二時だろ

からこれで筆をおくことにする

(二十四日夜)

一 隨想 松尾 澤子

女に少し過ぎる程の激しい気性に、生れ付いた私は、従つて、好嫌の感情も大変強くて、其為、自分の神經を何うする事も出来ぬ程焦立てる事があります。

或る人を好きだと思えばその人に全部的に好意を持つ變り、又嫌と思えばどんなにその人の長所を認めても、其の人に対して、優しく親しく接する事が私には出来ないのです。

こうした性癖は非常に私の欠点であり、殊に共同生活に於ては、邪魔になる欠点であると思つても私自身の内心から夫れが消滅してしまふ時機が来ない限りは、自分でもどうする事も出来ないのです

或る日、一人の友と色々な話しをした折にその友は、自分はどんなに或る人を嫌つて居ても、その人の前にゆけばその人の善良な部分に好意が、持てる……と云う様な事を云いましたが、私はそれを聞いてつくづく自分の内に傲慢な分子が存在して居る事を思つて寂しくなりました

併し私自身が心から実感をもつて、その友の云つた通りの言葉を味わない限りは、私は何してもいい顔をもつて、嫌な人に接する事は出来ません。若しも私が努力で以て、嫌な人の前に出てほほ笑みを浮べるとしても、必ず其処に生ずる偽善的な不自然さに、

私はもつと寂しい苦痛を味わう事だと思えます。幸、私はあくまで嫌な人に対して、自分を欺く事も他人を欺く事も出来ないのですが、何かした気分の時、自分でも冷酷だと思ふ程、露骨に險悪の感情を外面に表した後、何とも云えぬ寂しさに泣きたい程の感情を味わう事があります。

人を憎悪する事は勿論、嫌うと云う事は実際、考えてみると不遜な、本当にいけない感情だと思つづく思いますけど、これも自分の様な性質に生れ付いたものには心からそんなものに超越してしまうまでは致し方のない事だと思えます。と云つて、決して自分の欠点を是認してしまう訳ではないのですが、偽善的行為に終つてしまふよりも、偽らない自己を曝け出して居る事を私は恥ません。

一体に他人に対する好意や愛情は、自分自身の誠の心の底から、何の努力なしに、自然にほとばしり出たものでなくては、本当に熱い、純粹なものではないと私は思つて居りますので、ちよいちよい努力によつて愛を育てると云う様な言葉を耳にする時、私の心は肯く事が出来ません。ですから好意持てぬ人に対しても、自分の心の命ずるままにまかせておくより外ないと思つて居りますし、又それが一番自然だと思えます。

私達に感情が与えられて居る以上、そしてそれが洗練されていない以上、ほとばしり出る感情のままを、私達の日常生活の上に

織込んで行く事は、面白い事でもあると思えます。

私は何よりも、型にはまった人間が嫌いなのです。こんな人の前に出ると、息づまり相に窮屈を感じてたまりらなくなつて来ます。

何のこだわりもなく自分の心の底から流れ出るままの自由な生活したい時は高らかに笑い、悲しい時は心から泣く事が出来る、偽らないその人の姿が何処にもうかがわれる赤裸々な生活を私は何よりも愛します

13、奈良を去る武者小路氏の送別演説会

和歌山に行くは姉の墓参のため

「大和日報」大正一五年二月五日

愈々来る八日奈良を引上げる武者小路実篤の送別演説会は五日午後二時より市内大豆山町満月会事務所に於て開催「武者小路先生を送る」の演説の下に新しき村会員西久保奈良石氏が登壇武者小路氏の来寧から支部の設立、その後の状況を述べ、今武者小路氏をこの地から失ふことの淋しさをのべ更に支部今後の方針等を三十分にとり演説次ぎに武者小路氏登壇この度奈良を去るに際しての感想を述べ、一時和歌山に移るのは自分の十五歳のときなくなった姉の墓があり、その姉には恩も深いことであるため、しばらくでもその墓石のそばで日を送りたいのが目的で某紙に報じられた子供のためや、奈良の寒さをいとう

というのではない旨及今後の考え等一時間に亘り述べ、つづいて茶話会に入り、午後四時会をとじた

尚閉会後会員及有志公園にて記念撮影をなし、公園江戸三八方亭において晩餐会を催す

14、第二 新しき村号

注 第三面左半分六段をこの「第二 新しき村」特集に充てている。紙面理解の便宜のため、編集者北村信昭のコラム「卓上噴水」を最初に紹介しておく。

「大和日報」大正一五年一月六日

A 卓上噴水

署名「信昭」

めつきり寒くなった相変わらず原稿の山！自然発表がおくれて済まない◇新しき村号の原稿もまだ後一回分位はある、金子仙氏、大阪の杉本文彦氏の小品感想、京都の東坊城恭長氏、和歌山の林一雄氏及び熊谷直臣諸氏の詩は次号ですっかり掲載し得るつもり◇本号は第二新しき村号として四氏のを発表、こんど新潮社から出版された詩集「一人凝る」の著者佐々木秀光氏の詩品を得られたことはまことに喜ばしい◇武者小路氏は愈々近日奈良を引上げられる、淋しいことだ、たとえ期間が短くとも武者小路氏の来寧によって、いび振わないわが大和文壇(?)には大なる刺激となり、一エポックを画したことはまことに感謝すべきことと思

B 「狼」の上演を観て

T・Y・M・

う◇新しき村奈良支部が生まれよき仕事をなしつつあることは其もつともなるものである◇それからこの度新しく口語短歌を募る事となった「弱冠」による福田米三郎、岩井弥、山名徹平井いさむの諸君が中心となり「郷愁」の清水信氏顧問格(?)となつて奈良新興歌人協会を組織した◇口語歌の送稿は同協会宛にお願いしたい◇本号の段抜きカットは既報のとおり橋本健吉氏の作品！まだこの他に四五種素的なのがある◇今夜も十二時になった、龍太郎のくゆらすレディ・ハミルトンの紫煙がゆらゆら……ゆらゆらと夜が更けてゆく……四日……。(信昭)

築地小劇場が大阪でロマン・ロオランの「狼」をやるといふ。そして村の関西支部が連合してそれを観ようという。何よりもいい機会だ、是非行かなくては……そんな訳で京都からも私たち四名のものが十月十七日の夕に朝日会館へと出かけた。少し時は経ち過ぎたが当夜の感想を少し書き連らねてみよう。

注 右は書き出しの一節。以下に演劇評と感想が続くが、全文、演劇についての印象記であり、「新しい村」に関わる記述がないので省略する。

C 武者小路先生をお送りする心

西久保 奈良石

奈良から先生を失うことは限りなく淋しい

奈良に大仏殿のあることは世界への誇りであろう、同様に奈良に先生の居られることは人類への誇りである

今その先生を失う、親鳥を失った雛鳥の寂寞さを痛感する、出来ることならもう暫くとお引止めしたい

生あるものの凡てが別れに際しての淋しさそして涙、俗世間的であるかもしれないが私はやっぱりそうした気持ちになる、毎夕西の山へ落日を送るあの心持で先生をお送りすることは出来ない

先生の奈良在住は一年足らずの短日月ではあったが、先生をお送りする今こうした涙の気持ちにまでなり得た自分を、第三者的に知ってうれしく思う、このうれしさは私の幸福である

私はこの気持を永く忘れないで生きたく思う。そしてその忘れる日の無い事を将来にいのる。この気持ちが私の内のどこかに宿っている間は、先生のことばを聞く耳があり先生の足跡を見る目がある。私はこの自分の耳目を愛する

そして生甲斐のある生活へ精進するであろうとの力を、その気持ちから感ずる

□

私は先生をお送りするとき、決して泣くまいと思う。女々しいからではない。泣く事によって考えなければならぬ事を忘れてしまふからである

私は奈良支部を愛する

奈良支部は先生が蒔かれた人類のための若芽である、まだ弱々

しいかも知れないが祝福されていいはずの若芽である

奈良支部から先生を失うことは独り立をゆるされたのである
やがて来るべき時が来た迄である

お互兄弟達は一層の協力を必要とする

雨をおそれるな

風をおそれるな

雄々しく成長することのたのもしさ。

D 寂しさはひとりで 佐々木 秀光

淋しいことや悲しみを

人に話すのはよそう

そうしたことて人の気持ちを

暗くさせるのはわるいから

今日も私は悩みにしずんで

田舎の道を歩いてゆく

どんなに泣いて涙しても

そこでは誰にも気がねがない

さまよい歩いて私は家に戻り

また友人に遭ったりする

いつも私が快活でいると

友人達は互いに話しあっている

それで私も満足だ

そして自分にささやくのだ

淋しさや悲しみを

人に言うのは止めようと

(二六、一一、一八)

E

よき個人よりよき社会へ

仲川 明

◎ 私たち人間は無人数では生きられない。他の人たちと共に社会を作って生きねばならない

◎ 自分という個人を十分に生かすきつて、よき生活をしようと思

えば、どうしてもよき社会というものを予想せねばならない

◎ よき個人あつて始めてよき社会がありよき社会があつて始めて

よき個人が完全に生かされるのである

◎ 今日の政治家は物とか制度とかを主眼としてよき社会を考えているが愚なことだ

◎ よき社会はよき個人の精神の上に立たねばほんとはじやない。よき社会を作るものは制度や設備でなくして個人の心掛けである

◎ 自他共に正しく生き、和衷協力して人類の爲めに働こうという新しき村の精神は、ひとり現在新しき村の者達の専有ではなく

全人類の標語でなくてはならぬ

◎ こうした精神でよき世界を希求する人が集まれば、きっとよき社会が出来るだろうというのは私たちの信仰である

◎ 私たちはよき世界を理想しているが空漠な理想郷を夢みているのではない。よき世界を作る前によき国、よき県、よき村を予想している

◎ 一朝にして一国をよき世界に改めようとする様なことは余りに個人の精神を無視した唯物的な考え方である。よしんば立派な考えにしても、それは大きな危険を伴うものである

◎ レニンはその点、大きな理想家であつたが、私たちの同志ではなかつた

◎ よき社会を作ろうと思えば先づよき村を作ることだ。それに三つの方法がある

一、現在の村を改良してよくしてゆくこと

二、別に新しく理想的な村を創設すること

三、地理的に新しき村を作らずとも同じ理想を持つ個人や家庭が精神的に集まって、時々会合して社会的生活をし、自分達やその他の人たちの爲に働きよき世界の来る様に骨折ること

◎ 日向の新しき村はその二であり新しき村奈良支部は其三である私たちはそのいずれの方法たるを問わず自分がよき個人であると同時によき社会を作るために働きたいものだと思う

15、第三 新しき村号

注 第三面全面六段を充てている。紙面左下隅のコラム「卓上

噴水」(北村信昭) 冒頭に「本欄も後二回で大正十五年度の幕をとじる、新しき村号の原稿もこれですっかり片づいたわけである」と見える。他に「詠草」として山名徹・岩井彌・清水信他の口語短歌が紹介されているが、新しい村運動とは直結しないと思われる内容なので割愛した。また「詩」のようなものが三篇掲載されており、直接新しい村に触れる文言は見られないが、支部活動の雰囲気を知る資料として、これは紹介することにした。

「大和日報」大正一五年二月一三日

A 先生の詩と詩壇

吉田 龍太郎

武者小路先生の詩は今の日本の詩壇の空気とは全然掛離れた遙に高い所に座をしめてゐる大きい恒星である

近代詩の印象的象徴的なものとは違った力強い味のあるものであつて一つの思想である。試みに『日本詩集』を繰って見るにどの作品もどの作品もかほそい線で組まれた文化住宅のようであり曲った柱で漸く保つてゐる古ぼけた破屋である神経衰弱にとりつかれた者の寝言らしくまことに詩を読む人の心にピツタリと来るものは少ない詩壇が文壇から継子扱いにされるといふ不平を常に

聞くがそれが当然であつてこれを認めていた日にはあちらからもこちらからも蟻のように所謂詩人連が押掛けて来てうるさくて仕方がないだろうあまり喧しく騒がれると真面目に勉強する人の迷惑である。以前誰かが詩壇にはあらゆる主義がある文壇にはないあらゆる世界の新思潮が渦巻いてると自慢していたが成る程グダイズムとか構成派とか表現派とか色々な看板ばかりの毛色の変わったものは沢山あるがどれも一人よがりのもので本當に心からその美しさ力強さ気高さに引かれて喜べるようなものに出会わなかつた悪趣味であり病的である岡田刀水氏、岡本潤、高橋新吉、田邊憲次郎、萩原恭二郎等のものは何だか訳らない。詩壇がてのよう^てに曲がつてしまつたのはあまり独創、独創と喧しく朔太郎あたりが叫んだために若し連中が我れも我れも詩の本質^てに忘れ特異の作品をものし、他人と自分を判然と色分けして自己の存在を強く認めさせんとした為、段々と詩の生命を失い遂に變てこゝな邪道に迷い込んだものと思う、本當に心の歌を望む人々にとつてあまりに違つた詩壇である、以上継子扱いにされるのも當然である

先生の詩にこんなものがある

お前の書くものは詩か

何でもい

俺の心が生きれば

何でもい

詩のみならず総ての文芸作品に形式にのみ囚われてしまつて心を生かすことを忘れたものがある、殊に今の詩にこれが多い囚われた作品には生命がない、ふやけた悪趣味な、アブノーマルの作品に呪いあれ

先生の詩は、全然詩の何たるかを知らぬ人々に迄喜ばれる詩でありそして凡ゆる人々に愛されていると思う、三好十郎は以前時事で武者小路氏や千家氏の詩は、詩を作る一步前の気持であると書いていたが、遊戯化した頭の悪い今の詩以上である、コンベンショナルという人もあるが、その人は平面的に見ているのであつて、その詩の奥に燃ゆる生命の炎を感じぬ人であらう、力のない、奇抜なものが詩であるとすれば、先生の詩は詩以上のものである、魂の底から湧上る詩、本音を吐いた詩の力強さ、美しさ

似不非而詩人が大勢出て来て手品師のように、火花のような色とりどりの詩を使分ける、どの詩も美しく見えるが、じきに消えてしまつて見物の人の心にはつきりと映らない、これでもか、これでもかと千変万化させるが駄目だ、到頭お了いに力が抜けてしまつて、仲間同士喧嘩を始めた人々は食つて腹に力のつく餅のような詩を求めている、食つても食つても腹の足しにならないで、かえつて胃を壊すカルメロのような厭にべたべたした甘つたるい詩は御免だと云っているらしい
(おわり) 一九二六、一一、二四

B 基礎時代 大阪 杉本文彦

何事も初めが大切でもありまた困難でもあるのだ。建築をするにも初めに基礎を造るに如何に多くの費用や日数や労力を費すことか基礎が出来ればその建築は半出来たと言つてもいいのだと思う。

何事も初めに先ず基礎だ。この基礎がしっかりしていないとあとでいかに岩丈な建築をしても耶蘇の言われた砂上の家であらう。

人生に於いても青年時代がその基礎を造る時だ。この大切な時にかうかかしてははその人の一生は砂上の家の如くであらう。

新しき村も今その基礎を造つて居る時だ。実に困難なそして大切な時なのである。

新しき村の基礎は次第に兄弟姉妹の協力と努力に依つて岩丈に造られつつある。この事を知らない人は新しき村が何をしているのかと怪しんで居るかもしれない。が新しき村は今岩丈な基礎を造りつつありそれが完成に近づいて居るのだ。

如何なる転変地変が起つても理想的な基礎の上にたてられたものは壊れる事がない。其の様に新しき村が今築きつつある基礎が完成したときその上にたてられる新しき村の堅固さは想像に難くない。

岩丈な基礎の上に立つ新しき村の素材は今至る所でたとえそれが皆に見えなくとも洗練されつつあるのだ

C 夜 曲 和歌山林一雄

深夜ふと目覚めて

戸を繰ると空は壮麗な祝祭である

どれを見ても珍しく

大粒の星が

手に取るように鮮かに輝き

何事か楽しげに語り

微笑んで運行している

組をなして行くのは中でも若い星

一段と花やかに裳裾を触れ合せ

陸じく寄り添い楽げに語り合つてゆく

若い星達は群て花束を捧げ

透き通るような清い肉体には

優美な翹を生やして

若い星の組を纏つて嬉々として飛びめぐり

老たる星は威儀を正して祭司の役をつとめて居る

思い出したぞ

そうだ今夜は

星の国では稀有なすばらしい祝典なのだ

若い星達が幾組も婚姻の式を挙げるのだ

一年に一度も滅多にやらないと云う大変な儀式だ

それで老いたるも若きも問わず

夜を徹して眠らずに輝く様な盛装を凝らして
遥に高く更けて行く空に

歓喜のどよめきを揚げて居る

普断のつましさととは

打つて交つた

昂奮しきつた花やかな光り

秘密を暴露した天空の美しさ

混沌として眠りに落ちた暗い地球の上に

何と云うすばらしい美だ

星の王子や姫君達の

奇蹟の様な花やかな行列

幸夜中に眼を覚したので

この屋根裏の

貧しい詩人も席末に列する事が出来て

こんなうれしいことはない

ありがたい勿体ない

そこで一生懸命書いて

遥に拙詩を捧げ

この盛大な祝典をお祝い申そう

桜

道の傍に桜の木がある

花の季節には折られると見えて
小さい木だ

枯枝が醜くくつついている

幹が稍太く僅な葉が下枝に残って

優しく紅葉している

涙ぐむ

D 自分へ過失る

金子 仙

あれは何としても鼻持ちならぬ腑甲斐ない仕儀であった

自分自身からはじめじめと痛めつけられ梶氏には

「あの妙なマダムが自分に……」とよしとられていようとも弁明すればなお滑稽なものになるといふまことにむづ痒い惨めさだつた。

然しその場合梶氏の思惑が大して気になったわけではなく自分があれ程大事にかけていた「心地」を手ももう正体の異った

変てこなものとして人の心に「おり」のように残して了ったという自分の立腹であった。勿論梶氏は好きな人であった

どうせ自分がほのぼのと懐しんだあの「心地」の中の人であつてみれば、恋したととられていようと、差して気にはならない筈ではあるがそれが世間普通のものにとられていそうなのがいやでもありそんな事にさせた自分の仕儀が酷くいやであった

自分はその春のあけぼののようなほのぼのとやって来る人懐し

さの「心地」を愛して居た

我欲というものの微塵もない登明な朗らかさが好きであった。起そうといつて、ままになる心地ではなく、まるで発作のようにやつて来て、又後かたもなく薄れて行くものであった。それには男女の差もなかった。疲れた気持も、なえかけた心もそれによつて、生き生きと潤い、蘇生した。

それは物心つく頃から覚えて、死ぬまで、持ち続けていたい、

「心地」であった

そして決して発表すべきでなかった。

それは屹度調子の低い、変てこなものになって終うだろうし第一惜くもあつた

それをどうしたはずみか、何事も承知の筈の本人が、ふらふらと梶氏に、それもふやけた調子で、ぶちまけて終つたのであつた。

それを梶氏は、一等利口な方法としてか、そのものを黙殺して終つた

氏が若し、軽く明るい返事で、あの後悔をあやして呉れたなら？とは微かに思ったが、それは、許せないものがあつたし、大した異いでもなかつた

只管、その自己に不忠実な軽はずみな自分がいやでいやで、すっかり憂鬱を感じて居た

然しそれも可成り長くかかった揚句ようやく、その痛みが抜けたかかった時、又氏と逢う事があつた

氏は同席の人たちが去った後、「ご主人のいらつしやる時の方が面白そうなので、お二人のいらつしやる時御伺いたします……」といった
自分の心は、すっかり硬直って了った
その自由を失ったそんな心の状態を非常に嫌いな自分がなおの事参って了って、氏の一言一言にペソを搔くのであった

E あの人 東坊城 恭長

ねえ君

僕は嬉しくてたまらないのさ

あの人が

愛して呉れるのなもの

◆ あの方は

殺されても

僕から離れるのは

いやだつてさ

何と云う

心強い事だ

◆ 素晴らしい人生じゃないか

惚気てるのじゃないよ

僕は悦んでいるのだ

◆ 晴れた

晴れた

僕の心が

あの人に

愛されて

◆ 生きることは

愛することだ

◆ 生かされることは

愛されることだ

◆ さあ皆さん

握手しよう

握手しよう

皆んなの人と

握手なさい

◆ とあの方が僕に教えた

僕が

F 秋 晴 れ 熊谷 直臣

前庭に乾した番傘に
桐の葉がばさりと落ちた

君に親切にするのは
あの人の魔法なのさ
あの人の魔法つて
僕に対する
あの人の愛の力さ

◆

人生って愉快だなあ……
とあの人に会うと
そう思う

◆

あの人は
僕に依って
幸福になったと
感謝するけれど
それ以上
僕はあの人に依って
幸福にされちまったのさ
実に実に
(七月三十日)

今日初めて巣箱から飛び出したセキセイの雛は
蒼空に向って珍らしそうにさえずっている
菊の香の親しさに
陰鬱な部屋から出て来た私の疲れた頭には
秋晴れの瑠璃空は冷たすぎる

雲

山の彼方に浮かぶ雲の白さ
その雄大さ
誰をも魅了する荘厳さである
私はいつもあの白雲を見つめて
人類相愛 人間相互の幸福
自由な生命の飛躍の
ユートピアを夢想する

ああ あの白雲の上に
皇々とした理想の世界が開けて
真裸の生命が雄躍するのだ

16、新しき村の廉売市二十四日に日延べ

【大和日報】大正一五年二月二三日

既報——新しき村奈良支部食料品部主催青森愛媛大阪支部後援の食料品廉売市は二十二日公園猿沢池畔きぬかけ柳前にて開催の筈であったが準備その他の都合により二十四日午前十時から午後四時迄に日延した

17、武者小路氏作愛欲上演の築地小劇場

観劇会員募集

新しき村支部主催

【大和日報】昭和二年一月二〇日

昨秋大阪朝日会館においてロマンローラン作「狼」を上演し人気を博した築地小劇場にては今月末同朝日会館において武者小路実篤氏の雄作戯曲「愛欲」の上演を見ることになったが、この際新しき村関西各支部連合主催で、築地小劇場観劇会会員を募集し、一月三十一日（午後六時開演）を期し団体観劇をなすことになっているが、同会員の座席は特別いい場所を前約してあることとて当地方よりの観劇者には同会入会が最も便宜であろうと、希望者は会費一円五十銭（A席）を添え、二十五日迄に奈良市公園帝室博物館横飛鳥園内新しき村奈良支部あて申込まれたしと

新しき村食料品部

さきに廉売市を開催した新しき村食料品部では、続けて大阪支部より天満桜味噌を取扱うこととなり毎木曜日と配達日として注文に応ずることとなったが、紙箱詰五百匁入八十銭一貫匁入一円六十銭、（赤白同値）にて、市内高畑町大浦方新しき村奈良支部食料品部にて注文に応ずると

18、奈良 新しき村号

注 第三面六段全面で構成。紙面左下隅のコラム「卓上噴水」

（北村信昭）を紹介する。「この三月で新しき村の奈良支部が生れて一週年に該当するので既報のとおり本号を「奈良新しき村号」として、支部会員の作品を集めた◇例によつて渡辺三郎氏の労を煩わしたここに謝意を表します◇泡沫の且結びては且消え……とかこうしたグループは兎角竜頭蛇尾に終りやすい◇その中であつて苦闘しつつも伸びて行くその意気その熱は何人も祝福するに吝ならざるを思う◇本号に採録出来得なかつた三四の原稿は次号に廻しました」と見え、新しい村の支部活動への関心が一定層に浸透している様子がうかがわれる。

【大和日報】昭和二年三月七日

A 人類の理想

中川 明

- ◇人類は自己の生命を自覚し、自愛することの出来るようになった動物であるということができないだろうか？
- ◇然もその生命は超個人的な生命であり、絶対的な或る者と或る連なりを持つものだという事を自覚する様になった人間のみが真理の世界に住む
- ◇ヘーゲルは「凡ての学問の目的は精神が天地間の□物に於いて己自身を知ることである」といった。学問も之に向っていない時は邪道である。
- ◇更に日本の西田博士（西田）に言った。「真の善とは唯一つ、即ち自己を知ること尽きる。我々の真の自己は宇宙の本体故に真に自己を知れば皆に人類一般の善に合するのみならず宇宙の本体に合し神意と冥合する」
- ◇学問の要は自己の意識体系を大きくすることであり、その体系の大きさが即ち自己の大きさである
- ◇われわれ人間には多くの欲求がある。然しその多くの欲求は同一価値の線上に並立しているものではない。われわれは更に更に大なる欲求の為に小なる欲求を整理統一する人間はそれを称して理性という
- ◇理性の要求とは更に大なる統一への要求である。これをわかり易くすれば自分はAを欲す（小要求）
- 然し更に大なるBを欲す（大欲求）

故にかなければならぬ（理性）

- ◇理性は理屈であつてはならぬ。更に大なるBを欲する情熱が高ければ高い程理性は力強く生命に輝く
- ◇すべての人々が持つ最大欲求、それを人類の理想というわれわれの願望はこの大理想の範囲内に於いてのみ許さるべきものである
- ◇人類の理想、それを表現すべき言葉はいろいろあろう、然し大精神は一つである。全人類の理想を目ざして一步一步進んでいく人々は新しい村の会員であるとないに拘らずどつかで同じ道を行き同じ手を握り合う人々だと思ふ
- ◇凡ての人類が正しき生活に入り凡ての人類が本当に協力出来る世界それは或はこの地上には永久に現されないかもしれぬ。然しわれわれはそうした世界の来ることを切に切に祈るものでありその為に少しでも自分が正しくなり他の人々もよくなつてほしいと願うものである
- ◇善人同盟という言葉がある。よい人が同盟してよい事をすれば悪い人もだんだん同化されて影をひそめるといふ意味である。善人とか悪人とかいう言葉が私にはびつたり来ないが、とにかく真の人間……これもおかしいが真人同盟とでもいおうかよい人々が集まつてよい生活をし他の人々を正しい生活に同化する力をこしらえることが人類の理想に近づく方法であらうと思ふものである

◇重ねて言う人類の理想はわれわれの最高目標である。科学も芸術も政治も宗教もこれによってその方向を定めらるべきである。

B 自然を愛せよ

山本 義一

若人よ

自分自身の中から

美と幸福を求むる希望を捨てよ

何故なれば

自己そのもの

それは罪惡の創造主なのだから

錯覚、欺瞞、矛盾に満つ人類社会の存在と

真摯なる愛と美を湛うる自然の生息

おお、限りなき蒼空よ

太陽は勇敢である

人類の醜劣を知るものはトルストイのみではなからう

自己の醜さを知るもの――

人生□如く悲惨であり寂寥である、虚栄よりは決して真の美は

生れないのだ

自分は人生と言うものに

深き悲哀と、社会に対して大きな寂寥を感じる者である

だが

自分は力強く叫び度い

自然を愛するものの幸福の絶大さを

C 余裕と生活の価値

西谷 熊雄

自分は百姓である

百姓程物質的に恵まれない生活は先ずない、だが百姓程生活から、精神から余裕を多分に与えられて居る生活もそう多くはあるまい、それだけ動もすれば生活なり人間なりが、空虚になり、怠惰になり勝に過ごしている事が多い。酒をあまり、下らない話の数々に与えられた余裕を過ごして顧みないのだ、すでに遠い過去の時代から、是が一つの精神となつて、かくして生きてきたのではないか、与えられた余裕をいい方に生かさなくあつたことが、農民を愚物扱いにされ来た起因ではなかつたか、もう少し農民が全部的に外分の余裕を完全に思索し、尊く生かして来たものであつたなら、かくばかり農民をして社会的苦極をなめさせずともよかつたろうと思う。百姓と云う生活が農民を禍したのでなくて、余裕の生かし方が悪くあつたために、尊い生活までも汚辱され屈従を強られて来たのだ。若し自分の思うことが間違つていなければ、此の事は所謂人間にも云い得られると思う。余裕を尊く生かし切れることは、生活に対する喜びとなり、希望となり、やがては光輝ある人間使命の上に立ち上がることが出来たのだ、又余裕の生かし方に依つて人間の醜美は分かれたのだと云つて相違ない

い、即ち人格の貴賤が判然となされて行きやがては自己の生活に直接に反映し支配して行くのだと思うで、自分は与えられた余裕を完全に魂のために果そうと思つてゐる。余裕は人間を怠惰に導いていくものでなくて、魂を偉大に成長なさしめて行くものであらしめたいと願つてゐる。自分は今にして漸く生かしかかつて来た。私の魂は余裕の前に跪き、生活に向つて大歓喜の声を禁じ得ない。自分は余裕ある人間生活よりも、生活より魂を生かし養う余裕を見出して行く人間生活を賛美し尊く思う。此の頃百姓の聲が大きくなりつつある。余裕の生かし方考えようが變つて来たからだ。加えて農民文芸が高唱され出して来た。何にせよ自分たち百姓にとっては幸福なのだ。余裕の生かし方が、生活の価値を認めさせて来たのだ。 一九二七、二、一九

D 誓い 渡辺 三郎

忍苦の裡に、美しき夢あり

× 夢の実現、即ち、人類の意志

× 今こそ、私は誓う――

神の御名によつて

亡き母の名によつて

――私は、私の一生を

× 新しき村の仕事に捧げます

(一九二七、三、一日朝)

E 残された仕事の一面 喜多 芳之

文芸に、評論に、美術の鑑賞に対する自分達の不断の努力と仕事は、人々から相等認められて居、又愛されて居る。より高きよりよき社会の為に生活を捧げて居る自分達にとっては、こうした仕事を離れて仕事と云うものを考える事は出来ない、然し乍ら村の仕事――自分達の仕事は只こうした範囲の仕事だけではないのである、ここに残された一つの大きな仕事を自分達は持つてゐる、それは経済的方面の仕事である。

パンの獲得に対する努力は現代では殆んど呪われた人間の重荷の一つとなつて居る。近代産業の特色である分業制度は人間から創造の歓びを奪つて終日終世無趣味な退屈な同一の仕事を繰り返すことによつてパンの獲得を我々に許して居る。職業と生活の不一致に対する嗟嘆はすべての人の口から洩らされている。分化を要求する職業と統一を要求する生活の間にはさまれて人々は苦悶して居る。真実に生活しようとする者にとってはこれは恐ろしい一つの事実でなくて何であらう

分業からの開放、創造への協力これが先ず我々の考えねばなら

ない問題であろう

これには精神的の精進と同時に生産と消費の完全な人類の協力が必要だと思ふ。村の会員が協力して近代科学の力をかけて各人がその個性に最も適した活動部門を選び、一つのものの生産過程が絶えず創造の歓びをもたらすと同時に、労働は単なる健康筋肉運動の享楽であり、健全な頭脳運動の愉悅となるならば人間の生命は機械よりも剰余利潤よりも尊ばれ、パンの獲得は一つの重荷でなくて嗜好に適合した一つの活動となる。

かくして自己を生かすために他人から強制されず又他人を強制しないですむ世界を事実の上で示そうとする村の運動は完全なものとなる、今までの村の運動は言いすぎかも知れないが余りに文芸美術—非経済的の方面に偏した一面的なものではなかつたらうか、経済的の方面の問題は日向の村の兄弟姉妹達にのみ委して置くのは濟まないことである、村全体の完全な発展は両者が各個の生活内に融合して発酵したものでなければならぬと思ふ

かくて自分達は「只全人間生活を把握せよ、各人はその生活を生活して居る」と云うゲーテの言葉に従い得られる

今奈良支部で始めて居る食料品販売の仕事はこうした目的の為の小さい一つの灯である、やがてこれが一つの松火となり、世界を蔽う火となる日を自分は夢みて居る

F 平和を求めて

河合 幸太郎

霜白き此の朝

梢の間から陽光はもれて

霜に反射する其の光はどうだ。

鶏はなきとりはさえずる

頬に沁み渡る此の冷気

身を振わせる此の寒気

だが私達は怠けてはならぬ

見ろ！ あの鶏声を——

見ろ！ あの楽き鳥のさえずり

苦しき奮闘の中に

寒さ冷さをこらえて

ただ団欒と平和を求める心——

飢と寒さに戦きつつ

而しこよない情熱を以て

霜をつき冷気に打勝ち

寒風を破って

生活へ——平和へ——

そしてただ生き様とする心の尊さ

空虚な平和、虚無の団樂。

それらがどうして私達を心から
なくさめるだろう。

わたし達が心に望む生活と平和は
ただ激しい自己の奮闘と

労働によってのみ得られるのだ

奮^マんだ、ただ闘^マうんだ

そしてそれ切りでいいのだ！

此の霜、此の冷氣、此の寒氣

それらは凡て尊いわたし達の

奮闘の前では吹けば消える

幻影にすぎない

今、木の間からは細い

しかし熱のこもった陽光が

輝いているではないか

そしてやがてその陽光が室一ぱいにひろがる頃

わたし達の求めるただ一つの平和が訪れるのだ

働こう、ただ働こう——平和を求めて

(一九二六、一二)

G 不具者の独白

森田 孝造

可也りさっぱりした一室窓から蓮池夏の野原が見える

不具者 (考え深そうに) 俺は今日三三人の女から笑われた。

何故笑われたのか、俺には判らない彼の女達は何故俺を何度
も振返って見て笑ったのだろう。(自分の身体を見て大きく

笑う) ハハ……彼奴等はこれを見て笑うのだな。成る程俺に

は片手が無い、それでも俺は働いて居る。生きる為に努力し
ている。俺の生活は俺を完全に生かし同時に人類の為に多少

は役立っている筈だ。それに何故奴等は笑うのだろう？人々

には何故俺を冷眼で凝視したがるのだろう？(問) そうだ俺

の身体は一個の人体として完全では無い。此の不具者、俺に
は調和から来る美が無いのだ。(深く沈んで) 新しい袋に詰

められた新穀の快よさ！置かれるべき処に置かれていない気

まずさ！せめて俺はもう一本の腕が欲しい。そうすりゃ俺

はもつと役立つ仕事をしてやるのに。俺は何故あんな工場に

行ったのだろう。大きな野原の真ん中に働くことを止める気

になったのだろう。俺の片腕をもぎ取る機械を何故あも恋

しく思ったのだろう。

神は何故俺にあの工場へ行く前に警告を与えてくれなかった

のだ？(深く沈む)

此のときポツポツと二つ三つ蓮の花の開く音聞える

不具者(ふと蓮池の方見て急に力づく)

お蓮の花が開いた何と云う美しさだ。あの開く音！、何と云う美しい力だろう、小さいけれど力強い熱がある、あれだ、あの力だ、おれは何故こんなにしよげているのだ。馬鹿な。汚い泥の中から出てあの力が大事だ、蓮の美しさはあの力にあるのじゃないか。そうだ俺も泥と戦うのだ。あの美しい力。小さい力。しかし強い力。泥の中に生命を与えられたのは俺の運命だ。蓮の運命だ俺はあの力を持って戦うべきだ。今更何故俺はこんな汚らわしい社会に生れたんだと嘆いても仕方が無い、嘆く俺が間違っている、何にも神を疑うことは無い、片腕を無くしたのも運命だ。そうだ。俺は俺の運命を開拓すればいいのだ俺の運命を切り開けばいいのだ。蓮の花の開く時のあの力！美しい力！涙ぐましい小さいしかし強い力！俺にも持っている。俺にも持ち会せている。戦うのだ泥と……社会と……（大きく片腕を振って）やって見せるぞ。俺は立派に生きて見せるぞ。此の片腕で立派に運命を打切つて見せるぞ。

H 詩

二 篇

ヴィクトル・ユーゴー

大塚 幸男訳

▲尊い目的に向て私が進むとき

尊い目的に向つて私が進むとき

脅す者は私を笑う

おお神よ！私が欲する事は正しいのだ

私はそれを望む、固き精神をもつて

怖るべき残忍なる六月も

過酷なる叫びも、嘲笑も

ボナパルトの横目づかいも

海の上に吹きつゝの風も

私を対象とする人々の怨みも、

何者をも私をよるめかしはせぬ

たとえ世界が崩れても、その没落は

私を粉碎するとも弱めはしないのだ

△夜の長きを

わが愛よ、夜の長きをいかにせん

ただひとり床の上に眠りもあえぬこの時よ

いたづらに時計の音はうちふるい

時おきて外になりわたる鐘のひびきや

心は醒て数わかぬ夢の中にぞまうなる

たえてひかりなきこのくらがりの中に

沈みがちな夜をば忘れん熟睡なく

またうまいを忘れん愛もなければ

一八四四年九月八日

19、新しき村の詩

【大和日報】昭和二年三月二八日

注 「鶯の鳴いた朝」（桜井 石）、「結婚の前日」（花栗実郎）、

「梨の花咲く頃」（岡西喜治）の三篇を掲載。同紙面のコラ

ム「卓上噴水」（北村信昭）に「本号の新しき村詩篇はこ

の前の新しき村号に収録し得なかつた分である」とある。

特に紹介するほどの内容でもないので、割愛した。

20、新しき村会員によって「関西劇研究会」
生る

演劇を職業俳優のみに任ず事の愚かさを痛感して

【大和日報】昭和二年八月三日

既報—新しき村奈良支部及び大阪支部の男女会員十九名によって「新しき村関西劇研究会」を組織し帝大助教教授成瀬無極、三高教授林久男、宝塚国民座の坪内士行、近松研究家の木谷蓬吟諸氏を相談役に仰ぎ真摯なる演劇の研究団体とし、将来劇団組織の準備行動として毎月二回大阪で集会し近代古典を通じて戯曲演出上の研究をなす筈であるが当分は作品の理解に主力を注ぎ、研究の結果は各支部例会で朗読試演の方法によって発表年一二回奈良、大阪で公演をなすが奈良に同人が増

えれば毎月の研究会を奈良でもやりたいと奈良支部に渡邊三郎氏を訪
えば、

「我々は此仕事を単なるお道楽で始めたものではなく、演劇を職業俳優のみに任して置くことの愚かさを痛感したからです、我々の芸術的欲求や生活感情を自由に発現する為に我々自身の生活の中に我々の劇場を持ちたいからです、聞けば県当局はいよいよ公園内に野外劇場を設けるらしいですが、将来我々の仕事が少しでも奈良の文化の為に役立つ日が来れば此上もない喜びです、又そうなることを祈りつつ努力を惜しみません、何処までも本質的にチリチリ進んで行くつもりです……」云々

尚同会には今秋十月初旬にゼー、オー、ピー、ケーから坪内士行氏指揮の下にシエクスピアの「ヴェニス商人」Ⅱ法廷の場Ⅱを放送すると

21、新しき村 第十二回演説会

十八日 満月会所

【大和日報】昭和二年九月一五日

新しき村奈良支部第十二回演説会は来る十八日（日曜日）午後一時より市内大豆山突抜町満月会事務所において開会（入場無料）するが当日のプログラム左の通りである

◆開会の詞

一武者小路氏の村に非ず 渡邊 三郎

◆演説

唯物史観に就て 渡邊 三郎

現代支那文学漫談 花栗 実郎

児童教育私観 桜井 稔

◆講 演 盆ハツ 「腕競べ」 京都帝大助教授 中村 直勝氏

◆朗 読 【新しき村関西劇研究会出演

武者小路氏作「一日の素盞鳴尊」 一幕

▲配 役、娘（北村兼子）父（久保山了）母（中村文子）素盞鳴尊（花栗実郎）恐しい男（渡邊三郎）村の男一（多田寿彦）同

二（杉本文彦）村の女一（若林澄子其他村の男女数名

特別講師の中村直勝氏は南北朝史研究の權威で東大寺春日神社談山神

社の古文書調べによって奈良とは最も関係の深い人である、当日演説

会後の茶話会席上に於ては来会者よりの質問に応ずる筈

尚当日来会者にはパンフレット「新しき村に就て」（武者小路氏著）

を一部呈すと

支部九月例会

右演説会後支部九月例会開会支部事業基金の件、会員家族共済資金の件、仏教美術展覧会開催の件について協議した後中村直勝氏及大阪

支部会員歓迎の茶話会を開く筈

22、大阪放送局より「ヴェニスヴェニスの商人」法廷の場を

関西劇研究会の第一回放送

「大和日報」昭和二年九月二十七日

曩に奈良、大阪、神戸の新しき村各支部員によって組織された新しき村関西劇研究会では来る二十九日夜J・O・B・Kより第一回の放送をなすこととなつたが脚本はシエクスピアの「ヴェニスヴェニスの商人」法廷の場法廷の場で出演者は坪内士行氏の懇切な指導の下に十数日間練習を経たものである尚配役は左記の通りであるが朗読の放送に先達ち「ヴェニスヴェニスの商人に就て」と題して坪内士行氏の講演があると

一、ラジオ・ドラマ

「ヴェニスヴェニスの商人」

|| 法廷の場 ||

配 役

(省略)

同部員は語る

「我々が第一回の放送に古典劇を選んだのには相当抱負もありますがそれは今後の事実によって見て頂くとして今度の放送は東

京、京都方面でも非常に期待され全国各支部か□は激励の手紙をもらっていますし、築地小劇場でも聴くと云っていますので益々重い責任感をうけています。幸に成績が好ければそれは指導して下さった坪内氏のお力ですし不成功の場合は我々の演技の拙劣によるわけです……云々

尚十一月には名古屋でストリンデルベルヒか武者小路実篤氏の作品を送る予定であると

【付記】

今回は本学受贈北村文庫の紹介を意図したので、北村文庫中の記事のみとなったが、県内図書館所蔵資料の中にも新聞がある程度所蔵されているので、それらの文学情報の調査も必要であることを、今回の資料整理の中で痛感した。

The Record related with “New Village” movement Nara Branch

Takashi Asada